

AEGIS-Women イベントご報告（第126回日本外科学会定期学術集会）

第126回日本外科学会定期学術集会において、2026年4月25日に AEGIS-Women イベント「キャリアアップ10ミニッツセミナー PART22」を開催いたしました。本セミナーは AEGIS-Women 会員ページにて動画配信しております。



AEGIS-Women 会員専用コンテンツ 動画サイト

<https://www.aegis-women.jp/member/index.html>

「キャリアアップ10ミニッツセミナー PART22 外科医の平行キャリア」

司会：杏林大学 消化器・一般外科
大木 亜津子 先生



1. 「医療におけるエンターテインメントの可能性」

公共財団法人 結核予防会 複十字病院 消化器外科
中山 祥末 先生



私は、開業医の夫と、高校1年生の長女、小学6年生の次女、小学4年生の長男の3人の子どもを育てながら、外科医として働く傍ら、漫画家としても活動をしています。漫画を描き始めたのは中高生のころです。長女の産休・育休中にブログブームが起こったことをきっかけに、育児や仕事をテーマにした漫画をブログ

に掲載し始めました。現在は『腐女医の医者道！』シリーズを年1巻のペースで出版しており、今年で漫画家として10周年を迎えます。

他にも、厚生労働省による緩和ケア啓発動画を制作したり、消化器外科医でもあり作家でもある中山祐次郎先生の著作『医者の本音』を漫画化したり、感染症とワクチンの研究をしている父と共同で著書を出版したりと、さまざまな活動を行ってきました。漫画は、難しい内容でも楽しみながら知識を得られるという魅力があります。漫画を入り口として、より詳しく知りたいと思った人が専門書を手に取ってくれば、それは医療情報を届けるための架け橋になるのではないかと考えています。正しい情報を、多くの人に、わかりやすく伝える。ここに医療とエンターテインメントの相乗効果があるのではないのでしょうか。医師と漫画家というパラレルキャリアを持つ自分だからこそできることがあります。専門的で難しく感じやすい医療を、できるだけ身近で親しみやすいものとして届けられるように努めています。

医師と漫画家など、昨今では兼業は珍しくありません。医療者自身がエンターティナーになることで他者を介することなく、正確な情報をわかりやすく、楽しく、魅力的に発信できるようになります。一方で面白さを追求するあまり、正確性が損なわれる懸念もあります。その点は私自身も十分に気を付けていきたいと思っています。

パラレルキャリアを続けるためには、「好き」という気持ちが何より大切です。仕事や家庭以外の活動に取り組むには、パワーが必要です。だからこそ、「これが好き」「これをしている時間が大事だ」という気持ちが、キャリアを継続するうえで最も重要ではないかと思います。私自身、非常勤勤務で胃カメラ検査をしていた時期もありました。夫の開業を機に再び外科医としての修練を始めました。外科医を続けていけるのか悩んだこともありましたが、結果的には、現在何とか外科医として手術を続けています。たとえ数年間キャリアが途絶えたとしても案外何とかなるものです。そのことも、私自身の経験を通してお伝えできれば嬉しく思います。

以前、テレビ出演をした際に博多華丸・大吉さんから「人生フルスロットルですね」と言っていたことがあります。“人生フルスロットル”、この言葉は私の座右の銘です。

2. 「京都から世界を カエル ケロロジー」

京都大学大学院人間・環境学研究科

大越 香江 先生



「京都から世界を カエル ケロロジー」語呂がいいと思いませんか。実は五七五になっています。ケロロジーの提唱者は100年カエル館を個人経営する高山ビッキさんですが、使用許可を得て私もケロロジーに邁進して情報発信しています (<https://kerology.studio.site/>)。

私の考えるケロロジーとは、カエルを通して自然環境、都市、文化、人間社会との関係性を多角的に探究する学問です。ほかの誰もやっていないので、私が世界のケロロジーの最先端と言っているでしょう。私は大学院生であると同時に常勤の外科医としても働いています。既に医学博士ですから医学研究もできますが、医師だからといって医学研究一筋でなく、その他の好きな分野の研究をしてもいいのではないかなと思っています。

なぜ医師がカエルの研究をしているのか。外科医は日々技術の向上と侵襲の軽減により、患者さんの予後をいかに改善するかに心血を注いでいます。それはもちろんとても大切なことです。しかし、気候変動や環境汚染によって生じる疾病や死亡、生物多様性の減少による食糧危機など、ミクロレベルでの外科医の気遣いや努力の積み重ねが踏みにじられるようなマクロなインパクトが、病院の外で起きていることに私は目を向けています。

人生観が変わったのはコロナ禍の時です。近所の池にオタマジャクシが泳いでいるのを見つけました。よく見るとヤゴやアメンボ、ハナアブの幼虫もありました。モリアオガエルやツチガエルがやってきて、それを狙うシマヘビやヤマカガシが集まってきます。カメラを設置して観察すると、アナグマ、タヌキ、シカ、イタチ、キツネも立ち寄っていました。たった一坪ほどの小さな池の中に、人間社会で多様性だのダイバーシティだのと言っているのがささやかすぎると感じてしまうくらい、豊かな生物多様性があります。三密回避のための多くの制限や、慣れない感染対策で多大なストレスを誰もが受ける中、私や病院の同僚たちはカエルを眺めることで癒されたのです。

私は現在、爬虫類や両棲類を研究する研究室に所属し、カエルの測定や声のサンプリング

グをしたり、池の水から採取した環境 DNA を解析したり、漢文資料からカエルに関する昔の記録を読み解いたりしています。低侵襲手術ならぬ低侵襲研究として、“Minimally Invasive Surgery から Minimally Invasive Sampling へ”を提唱しています。80か所で在来種6種を含めた7種のカエルを確認でき、種により生息場所の好みも異なることも把握しました（編集注：後日この研究は publish されました。Okoshi K, et al. Anurans in culturally managed temple and shrine waterscapes in Kyoto. *Urban Ecosyst.* 2026;29:236 (<https://doi.org/10.1007/s11252-026-02090-5>)).

都市化とカエルの種数には負の相関があります。考えてみると人間が住むところは水を利用しやすい場所です。人間が集まって都市を築き舗装する前から、そこにはカエルたちが棲んでいたと思います。つまり、人間である我々の方が新参者です。カエルの生息地に思いをはせることは、人が生きる環境を見つめ直すことであり、我々の環境を考えることにもつながっていくでしょう。「カエルのすむ世界に、ヒトもいる」、これを Take Home Message としていただければ私は満足です。

3. 「医師の情報発信における科学的アプローチ～学術広報の観点から」

京都大学医学部附属病院 消化管外科
山本 健人 先生



書店のどこに並んでいる本が売れると思いますか。一番売れる場所は入口近くの新刊・話題書コーナーで、次いで広い通路沿いです。どこにどのように並べるかによって、売れ方が変わります。本が売れるためには、著者が満足のいく原稿を書くだけでは十分ではありません。著者は原稿という原材料を提供し、編集者がそれを調理して本という形に仕上げ、営業担当者が書店の有利な場所を確保する。三者の足並みがそろわなければ、本は絶対に売れません。自分の本はどうしても売れてほしいので、私は発売日には10店舗ほどの書店を回り、自分の本がどこに並んでいるかを調べています。

情報の発信方法を工夫し、その結果を分析して改良していくという現在のスタイルの原点は、2017年に開設した医療情報サイトにあります。患者さんが病院を受診する際の一助になればと思い開設したサイトですが、いまや1300万回も閲覧されるまでに成長しました。コンテンツを作成する際には、「血便・鮮血」「血便・検査」など、共起語と呼ばれる、テーマと一緒に検索されるキーワードを意識することが重要です。さらに検索エンジンで上位に表示されるように工夫することも欠かせません。アクセス解析によって発信の結果を検証し、次の発信に生かします。

市民向けの啓発活動にも取り組んでおり、今年は横浜市医療局と合同で300名を対象とした市民講座を開催しました。参加者が講座を知ったきっかけとして多かったのはXなどのSNSですが、「広報よこはま」などの行政広報ツールも侮れません。SNSでは情報が届きにくい層にも届けられるという点で重要な発信手段だと感じました。

パラレルキャリアとはいえ私の本分は外科医です。身につけた発信のノウハウを生かして外科社会に貢献することが、何よりのやりがいです。日本外科学会や日本消化器外科学会の英文誌「AGSurg」の公式X、京都大学消化管外科の公式Instagramなどにも携わっています。日本外科学会が開催している小中高生向けの手術体験イベントは、登録開始初日に1400名以上の応募があり、サイトがクローズするほどの大人気イベントに成長しました。集客の主な手段はInstagramです。

発信する内容に応じて、ツールを使い分けることが重要だと考えています。学術関係の発信にはXが有効です。論文がXで紹介されると引用数が2.8倍になり、学会誌が戦略的にSNSを運用すると、論文のダウンロード数は20倍になり、論文投稿数が24%増加し、インパクトファクターが0.9上昇するというエビデンスもあります。「AGSurg」に閲覧数ランキングとビジュアルアブストラクトの導入を提案しました。私自身も、SNSを使って自分の論文を英語で海外に向けて発信しています。

情報発信を計画する際には、まず目標と対象を明確にした上で、発信後の情報拡散効果やデータを分析し、その結果を次の計画へ生かすことが、最も効果的な方法だと考えます。

編集：宗景絵里、松永理絵、大越香江